
ツレヤん...？

yuunagi

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ツレヤん・・・？

【Nコード】

N0274BA

【作者名】

y u n a g i

【あらすじ】

入院中だったミカエルこと新堂慎は仲間たちに退院祝いの飲み会の席を設けられてそれに参加するが、途中で気絶してしまい宴は即、幕を閉じる。その翌日、慎は久しぶりに登校する私立夕凧学園に妹の新堂杏を背負いながら向かう。その道中、友人である菅谷涼や幼馴染である摺木麻耶と再会するのだが……。

ブローグ〜ヒーロー凱旋〜 前篇 其の一

——市内某所。

人々が賑わいを見せる繁華街……。

仕事帰りのサラリーマンなどが居酒屋に立ち寄り、酒を飲みながら談笑を交わす騒がしい場所から少し離れた路地裏には一見さんにははばかられる一軒のバーがあった。

Broken Angel Wings（翼が折れた天使）と怪しく光るネオン看板が軒先に下げられ、クリスマスでもあるまいし色鮮やかに光の装飾が施された外装のバーにぞろぞろと入って行く不審な人物たちがいた。

その者たちは服装こそパーカーやらスーツ、ドレスと統一性がなにももの一つだけ共通点があった。それは彼らの服装のどこかには必ず白い翼のブローチが付いていた。

彼らはバーに入るすでの所で持参した仮面を付けて店内に入って行く。傍から見れば仮装パーティーの参加者たちに見えなくもないメンツである。

店内は薄暗く、カウンター席とテーブル席があり、パーティーをするには少々狭いフロアながらも先着順から空いている席に通され、残った者は案の定、立ち飲みとなった。

人でひしめきあう店内だったが一席だけ——テーブル席が空いているにも関わらず誰もそこには座ろうとはしなかった。誰かのために残しているような風にも見受けられる。

そのテーブル席の傍には演壇があり、各々好きな飲み物を手に取った者が次々と演壇に熱い視線を送り始める。特に何かがあるわけでもないそこに視線を向ける必要があるのだろうか？

すると、突然店内が真っ暗になり来場者たちが少しざわめき始める。それを見計らって演壇に向けてスポットライトが照らされ、何

かに気付いた来場者たちは歓喜して店内が少し揺れ動いた……。スポットライトの先には白と黒の対極的な色ながらも左右対称で目元には水滴模様が描かれた仮面を付け、白いワイシャツに白い翼のブローチを身に付けるその下にはジーンズというラフな格好をした人物が立っていた。

仮面の人物は歓喜に沸いた来場者たちをなだめようと両手を小さく上下に動かして、キザな対応をとる。

しばらくして、店内は静寂に包まれて仮面の人物は自分の姿を後方にいる者にも見せつけようと演壇の縁まで足を運んで丁寧にお辞儀をして、徐に口を開いた。

「——皆さんお久しぶりです。無事、この地に舞い降りる事が出来てこれも皆さんのおかげだと思います。ありがとうございます」

静かにそう語ると来場者たちのボルテージが再び上がって店内がまた揺れ動く。仮面の人物は再び来場者たちをなだめて制止させる。

「——ゴホン、えっと……まどろっこしい事はナシにして皆でパ——っとやりましょう！ かんぱ——い！」

右手に持っていた何も入っていないグラスを掲げて乾杯の音頭を取ると来場者たちも仮面の人物に釣られて一斉に「乾杯！」と嬉しそうに告げた後に飲み物を一気に飲み干して各々談笑に入った。

仮面の人物はゆっくりとした足取りで演壇を後にして、演壇の傍にある——彼のために空けられていたテーブル席に腰を掛けると小さく息を吐いた。

久しぶりの集会で緊張していただけにボ口を出さずに無事終えてホッとしたようだ。

「お帰りなさい、ミカエル」

テーブル席に腰掛ける仮面の人物の事を「ミカエル」と呼んで何のためらいもなく隣に腰を掛けたボブカットの少女は蝶をモチーフにした仮面を付け、服装もどこかの制服なのだろうか、セーラー服の上にエプロンを着用していた。

少女はさり気なくミカエルと呼んだ人物の前に飲み物が入ったグラスを置き、それにミカエルは手を伸ばして飲み物を口に含んだ。すると、ミカエルが突然、飲み物を勢い良く噴き零して苦しそうにむせ返る。

「……コレ、何？」

「健康ドリンク？」

「何故に疑問形？」

「いや、お——マスターが『祝いだ、持ってけ』って……」

少し申し訳なさそうに語りながら少女は自分たちが座るテーブル席の向かい側にあるバーカウンターに視線を向け、ミカエルも少女に釣られるように視線を向けた。

視線の先にあるバーカウンターには雑貨屋によくある定番の髭メガネを付け、親指を立てて口元を緩め白い歯を光らせる中年男性がいた。

そんな中年男性の姿に二人は額を押えて大きく嘆息をした。

「で、コレの中身は何？」

「……知りたいの？」

「いや、やっぱやめとくわ。世の中には知らなくても良い事があるもん……」

「うん、私もそれには同感……」

意見が合った二人は謎の液体が入ったグラスに視線を向けて凝視した。

グラスに入った液体は無色透明で一見普通の飲料水に見えなくもない代物なのだが、先ほどの事があるので普通の飲料水ではないのは明らかだった……。

「でもさ、飲む前に気付かない？」

「え？ 何が？」

「コレ、結構臭いよ……」

顔を引きずりながら徐に鼻を摘む少女にミカエルは首を傾げる。

「生憎、鼻が詰まって良く分からん」

「そう。それは不運と言うべきか幸運と言うべきか悩む所ね」

「そんなにヤバイ匂いなのか？」

「うん。ミカエルが話す度に匂いが来るよ」

「マジか。それは……うん、ごめんなさい」

「いやいや、こちらこそ何かごめんなさい」

互いにお辞儀の応酬でしばらく変な流れが続いた。談笑していた来場者たちもそのおかしな光景に気付いて、怪しげな笑みを浮かべながら二人のやりとりを見つめる。ニヤニヤと自分たちを見つめる視線に気付いた二人は頭を掻いて照れながら苦笑いをした……。

すると、仕様もない所をメンバーに見られてしまったミカエルが名誉挽回と言わんばかりに突然、グラスを手にとって立ち上がった。その行動に来場者たちは湧いたが少女だけは違った。ミカエルが手に取ったグラスは未だに原材料が分からない物を使用して作られたあの謎の液体が入ったグラスだった。そして、ミカエルがこれから何をしようとしているのかは流れる的に理解出来ている少女は少し顔を引きずりながらも心配な眼差しで彼を見つめる。

『一気！ 一気！ 一気！』

手拍子を交えながら一気コールが店内に響き渡る。

その勢いに身を委ねてミカエルは謎の液体が入ったグラスを口元に近づけるとためらう事なく口に含んで、喉を鳴らしながら一気に飲み干した。飲み干して空になったグラスを掲げると店内は歓声に包まれて、ミカエルは口元を緩める……。

会場の反応に安心したのか——突然、ミカエルはグラスを掲げたまま前方のテーブルに倒れ伏せる。卓上の物は全てその衝撃で転げ落ち、床一面に飲料水が飛散した。

唐突の事で呆気に取りられた面々だったが、良く見るとミカエルの身体が小刻みに震えており、痙攣している事に気付く。

『ミカエルーっ？』

店内に悲鳴が響き渡り、飲み会どころじゃなくなってしまい。久しぶりの集会は早々に打ち切られたのであった……。

ブローグ〜ヒーロー凱旋〜 前篇 其の二

——ミカエルさんが来場しました。

ミカエル「こんばんは〜」

ラファエル「こんこん」

ガブリエル「こんばんみ〜」

ガブリエル「今日、ミカエル再臨祭があつたんでしょ？ どうだった？」

ラファエル「どうもこうも……」

ミカエル「……」

ガブリエル「？」

ラファエル「マスター特製ドリンクを調子付いて一気飲みし、気絶しましたよ。折角の集会がパーです」

ガブリエル「それはそれは、思い切った事をしなさった……」

ミカエル「……すまん」

ラファエル「まあ〜いいですけど……。それよりもガブリエルさんはどうして来なかつたんですか？」

ガブリエル「そうだね〜。おんにゃによ子が離してくれなかつたんだよねえ〜」

ラファエル「……またですか」

ガブリエル「仕様がないつしよ。だって、モテんだもん」

ラファエル「はいはい……」

ガブリエル「まあ〜あれだよ。ミカエルくん、無事でなにより」

ラファエル「うん、お帰り」

ミカエル「何だよ、改まってさ。キモいわ」

ガブリエル「素直じゃないねえ〜」

ラファエル「でも、ミカエルらしいでしょ？」

ガブリエル「確かに……」

ミカエル「馬鹿にされているような気がするが……。でも、あり」

がとう」

ラファエル「w」

ガブリエル「今、悪寒が走ったわ……」

ミカエル「捨てた女の怨念じゃね？」

ラファエル「ああ、それはありえるね」

ガブリエル「……やな事言わないでよ」

ミカエル「www」

ラファエル「www」

ガブリエル「もう、イジメはんだい」

ラファエル「子供ですか……」

ミカエル「さてと、そろそろ……」

ラファエル「そうですね」

ガブリエル「だね」

ミカエル「じゃー明日からまたよろしく」

ラファエル「こちらこそ」

ガブリエル「よろしゅうに」

ミカエル「おやすみ」

ラファエル「おやすみなさい」

ガブリエル「おやす」

——ミカエルさんが退場しました。

——ラファエルさんが退場しました。

——ガブリエルさんが退場しました。

……。

……。

——レヴィアさんが来場しました。

レヴィア「渡さないわたしさないワタサナイ……。絶対に渡さない。必ずアナタを救ってみせる。そして、今度こそ殺す。殺すころすロス。ぜったい、殺してみせるから。だから、だから——もう、どこにも行かないですつと傍にいて……」

——レヴィアさんが退場しました……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0274ba/>

ツレヤン...？

2011年12月31日17時50分発行